愛し、かなし、恋し。

紀璃人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛し、かなし、恋し。

【Ｎコード】
Ｎ８０６８Ｖ

【作者名】
紀璃人

【あらすじ】
２人の覚。
旧都の人々。
すれ違い。
心の触れ合い。
その全てが。
暖かく包まれて…。

第一話　瞳を閉ざした少女（前書き）

地霊殿で心温まる話が作れれば、とおもいます。
また、書き終わってはいないです。
ちなみに不定期更新で。

第一話　瞳を閉ざした少女

地霊殿。
そこには2人の覚（さとり）と沢山の動物が暮らしている―。

＊＊＊＊＊

冬の地霊殿。間欠泉がらみでひと悶着あった後のこと。

古明地さとりはロッキングチェアに揺られながら膝の上の黒猫を撫でていた。とくに理由も目的もなかったがこうして何も考えない時間も必要だとは思っている。ただ、今回は疲れてしまったのだろう。久しぶりに弾幕勝負をした事だし。また、お燐がこの異変を起こす前に相談してくれなかった事も心のどこかで気にしていた事もあるのだろう。ふと喉が渇いている事に気が付いた。こうして椅子でぼーっとし始めてから随分時間がたっていた。

「お燐、ちょっとどいてくれるかしら？」

そう声をかけると黒猫は音もなく降り、少女の形（なり）をとった。

「どうしました？さとり様」

「ちょっと珈琲でも、と思ってね」

「言って下さったら―」

「いいのよ。淹れる時の香りも楽しみたいから」

「お燐ー！」

さとりがそう返したと同時に入ってきたのはお空だった。彼女は突然入ってくるとお燐に抱きつき、彼女の髪の毛をワシャワシャとかき乱した。

「わっ！ちょっと…」

「お燐～遊ぼ？」

「分かったからその手を止めなよ」

「わしゃわしゃ～」
「止めなってば！」
「うにゅ？」
二人が騒がしくじゃれあい始めたのでさとりは微笑ましく眺めていたが、ロッキングチェアでくつろぐ気にもなれず、自室で読書をする事にした。

＊＊＊＊＊

さとりは自室の明かりを灯し、本棚から適当に抜き出した本を読み始めた。
（そう言えばこのミステリー小説はまだ手をつけていなかったわね…。）
どれくらい時間が経っただろうか。
珈琲を飲もうとしてカップが空（から）だという事に気が付いた。淹れなおそうと思い、読書を中断した。しおりを挟もうと机の上のペン立ての横に手を伸ばして―

写真立てに目が行った。

写真には二人の少女が写っている。一人はさとり。もう一人は少し癖っ毛の人懐っこい笑顔を浮かべた覚の少女。彼女はさとりの腕に抱きつくようなかたちで写っていた。彼女の名は古明地こいし。さとりのたった一人の妹。
しかし今の自宅である地霊殿にこいしの姿はない。いや、もしいたとしても気づく事が出来ない。

彼女が笑わなくなってしまったのはいつだっただろうか。
彼女が暗い顔をする様になったのはいつだっただろうか。

彼女は他の妖怪の心を読む事で不快に思われてしまう事を知った。
彼女は他の妖怪の心を読む事で自分の心もまた傷つく事を知った。

だから彼女は第三の瞳を閉じた。
だから彼女は自分の心を閉じた。

それから彼女は誰にも気づかれない様になった。他人の無意識下で行動するようになった。今では誰にも関わらず、一人放浪したりしている。時たま地霊殿に帰ってきている様だが姿を見せてはくれない。

彼女を最後に見たのはいつだっただろうか…。

さとりは写真立ての見つめたまま、暫く立ちつくしていた。

第二話　から回る思い

「―さとり様？」
さとりは自分を呼ぶ声でハッと栓無き思考の世界から帰ってきた。
「あぁ、お燐。どうかしたの？」
「さっきから呼んでいましたけど…」
「ごめんなさい、気が付かなくて」
「いや、あたしは良いんですが。星熊の姐さんがよんでます」
「すぐ行きます」
そう言って写真立てを伏せてから部屋をでた。

＊＊＊＊＊

「さとり様、またこいし様の事考えてたのかな…」
お燐は何の気なしにそうつぶやいた。
「ホント、どこに行ったんだろう…」
伏せがちにそう残して部屋を後にしようとして、

―背後でドアが開いた。

しかし振り向くと”誰の姿も視認できなかった”。でも気配で誰かがこの部屋を後にした事がわかった。きっとこいしがそこに居たのだろう。そう結論付けて姿を見せてくれない彼女に悲しみを覚えた―。

＊＊＊＊＊

「―こいしが、ですか」

「あぁ、最近目撃例が上がっているよ。それに」
「彼女たちと戦ったのですか」
「ん？あぁ、そうだよ。この前異変解決に来た二人には普通に姿を見せて戦ったそうだ」
「……」
「それ以来、そとの妖怪の山や旧都の外れでもみかけられているらしい」
「…そうですか」
「つまり、なんだ…。まぁ報告だけでもしとこうかと思ってね」
「ありがとうございました」
さとりが礼を述べると勇儀は机の上に訝しげな視線を向けた。
「…ところで」
「はい？」
「この”三つめのカップ”は誰のだい？」
「―ッ！？」
さとりはいきなり立ち上がると周囲を見回した。
「こいし、居るの？居るなら姿を見せて」
「ちょっとお前さん、そんな怖い声ださないでも―」
勇儀がそこまで言ったところで玄関の扉が開いて、誰かが出ていった気配がした。
「こいし…」
「…彼女は無意識下で行動するんだろう？だったらこうして躍起になるのは逆効果かもしれないね」
「それは…分かっているつもりです。でも―」
「まぁ、気持ちは分からなくもないけどね」
「……」
「私はここいらでお暇するよ。またなんか情報があったら持ってくるさ」
「…お願い、します」
勇儀は一瞬さとりを気遣う様なそぶりを見せてから地霊殿を後に

した。

三つ目のカップに半分だけ残っていた珈琲に俯き気味なさとりの姿が映っていた。

第三話　運命的な邂逅

こいしは当てもなく旧都を歩いていた。特になにかあったわけでもないが、最近は（と言うよりも瞳を閉ざしてからは）いつもの事であった。

彼女は自分でもとある変化を自覚していた。

少しずつ他人に見られる機会が増えたのだ。原因は恐らく巫女と魔法使い。彼女達との邂逅だろう、と当たりを付けていた。

事実、彼女達と勝負してから感情の起伏が少しずつ大きくなっていた。それは無意識ではなくなる事、ひいては無意識下での行動が出来なくなっていると言う事でもあった。

こいしはまた誰かの前に出るのが怖かった。

こいしはさとりに甘えたかった。

でも、本人を前にすると姿を見せるのが怖くて、無意識に逃げてしまった。

「おや？こんなところに居るなんて。いや、あたしらの前に姿を見せてくれるなんて珍しいじゃないか」

「……？」

声をかけてきたのはヤマメだった。周りを見ると旧都のメンストからは少し外れた、外に向かう橋の近くの様だった。いつもなら勘づかれる前に回避するし、勘づかれたとしても姿を見せなかったつもりだった。でも今の台詞から類推するに、何度か見つかってはいたようだ。

「黒谷…ヤマメ…？」

「お？あたしの名前も知ってたのかい？…と言うよりそんなに可愛い声を出すんだね」

彼女は驚き半分、感慨半分と言った感じで答えた。そう言えば久

しぶりに会話をした気がする。相手の名前を呼んだだけなのに少し喉がひりひりしている。この前巫女たちと戦った時は叫んでも大丈夫だったのに…。とそこまで考えて叫んだ所為で喉を痛めていたのかも知れない。と思った。

「……」（こく）

少し頷く。これは名前を知っていたことに対する肯定の意味で。

「逃げないのはあたしだからかい？それとも、何か変化でも？」

「……？」（そう言えば何故彼女と対話しているのかな…？）

「んー。自分でも分かってないのかい？」

「きっと、両方。」

「ん？」

「貴方は積極的だからってのもあるのかな？」

そう言って首を少しかしげる。少しずつ声を出しても痛くなくなってきた。

「…。随分と少女的な動きだね。あ…っと、名前で呼ぶよ？」

「うん」

「こいしはもともと明るい子なんじゃないかい？」

「昔は、そうだった」

「……。」

「話、聞いてくれる？」

「あたしでいいなら、いくらでも」

こいしは自分でも気が付かないうちに自分の過去を、自分が心を閉ざした訳を打ち明けていた。きっと少し心が開き気味だったところにヤマメが不躾でないように、こいしの内面と対話したからだろう。

「……それで、今こいしはどうしたいんだい？」

「どう…って…？」

「このままがいいのか、自分一人でこの旧都の中に溶け込みたいのか、地上に出たいのか、――元いた場所に帰りたいのか。それは自分で決める事じゃん？」

「私は…おねえちゃんと一緒にいたい…。」
「ん。分かった。あたしも協力するからさ、前みたいに一緒に居られるように頑張ろう！」
「うん…！」
こうしてこいしはヤマメと言う協力者を得て、「無意識から出る」決意をしたのだった。

第三話　運命的な邂逅（後書き）

どうも、みなさん。
四日ぶりにログインしました、紀璃人です。

作品には関係ないのですが、
依然として修羅場は（宿題は）終わりが見えません。
恋し。を更新するのは六日ぶり？でしょうか…。
宿題がかなり行き詰って、気分転換に小説を書こう。そう思ったんですが、書けませんでした。よく見たら恋し。の三話がそこそこ書いてあったので加筆修正して相まみえた次第です。

現在、ちょっと外出した隙に筆箱が無くなりまして、筆記用具がないです。大変に大変な事態です。
文法がおかしくなるぐらいに大変です。
…ホントに作品に関係なかったですね。
活動報告でやれよ。って感じではありますが（笑）

何はともあれ、弾丸と恋し。の二作品に次回更新は依然として未定です。
ご迷惑かけますが、必ず再開したいと思いますので、その時は再びご愛読いただければと思います。
あとがきで長文失礼しました。

第四話　すれ違う思惑（前書き）

さとりのために少しでも早く会わせてやりたいと考える勇儀。
こいしのために少しでも慎重に進めていきたいと考えるヤマメ。
二人は同じ事を目指しているのに―。

第四話　すれ違う思惑

無意識から出る。とは言ったもののどうすればいいのか見当が付かなかった。
「う～ん…。とりあえずあたしの友達にあってみるかい？」
「嫌、怖いよ」
「大丈夫だって。向こうも恥ずかしがり屋だけどいい奴だから」
「……」
それでもこいしは人前に自ら姿を見せる事自体に対する恐怖が拭えない様子だった。眉尻が下がっていて、怯える小動物みたいになっていた。もしここに霊夢や魔理沙が居たら、別人だと言うかもしれないぐらい縮こまっていた。
それをみてヤマメは苦笑しながら言った。
「大丈夫だよ。三人とも似たようなものさ」
「…三人もくるの？」
ついに目をそらしてしまうこいし。ヤマメはこいしの震える手を優しく握った。
「いや、こいしと、あたしと、キスメ…って言うのはそのあたしの友達の名前ね。三人とも自分の居場所を探してたってこと。」
「ヤマメも？」
「うん。あたしだって昔は虐められてこの地底に逃げてきたんだ」
「…意外かも」
「よく言われるよ」
そう言ってヤマメはニカッと笑って見せた。
(私もいつか、こんな風に笑えるのかな…)
「こいしにも『意外』って言われる時が来るかもね。あたしにだって出来たんだから。覚でも土蜘蛛でも関係ないよ」
この時こいしはヤマメが本当にまぶしく思えた。

結局そのあと、明日の九時に地霊殿に向かう橋の上で待ち合わせをする約束をしてから別れた。
「怖がらないでいいからさ、ちゃんとおいでよ？」
ヤマメはそう言って走り去って行った。

＊＊＊＊＊

「ヤマメ、ちょっといいかい？」
「おや？どうしたんだい姐さん？」
勇義は走ってきたヤマメを呼びとめた。さっきまでヤマメが”誰と話していたのか”が気になったのだ。
「お前さん、今誰と話してたんだい？」
「え？こいしだけど…」
勇義はヤマメの回答に耳を疑った。あの子はどうコンタクトを取ろうとしても返事をくれないのだから。今しがたさとりの声を聞き入れずに地霊殿を出ていったばかりだというのに、ヤマメと会話していて、なおかつ親しげにしているのが信じられなかったのだ。
「！？こいしって古明地の妹さんかい？」
「そんなに驚いて、どうしたってのさ？」
「実はな―」
勇義は今さとりがどんなふうにしているか。こいしの事をどんなに探して、心配しているかを伝えた。
「そんな事になってたのかぁ…」
「だから今すぐにでも会いに行かせてやれば―」
「そいつは駄目だよ！」
ヤマメは自分でもびっくりするほどの声で勇義の提案を却下していた。
「…っ。ごめん、でも今はまだ駄目なんだ」
「そいつはどうして」

「いま、こいしは大事な一歩を踏み出そうとしているんだ」
「さとりに会わせてやる事は出来ないのかい？」
「そのための一歩なんだ。今焦って失敗したら、きっとまた籠ってしまう」
　要領を得ているようで微妙にぼかした言い方に勇義は煮え切らない思いを募らせ始めた。
「そんなの分からないじゃないか、会わせてみないと」
「あたしにはわかるんだよ」
「なんでそんな事が言えるんだい！」
「あたしがそうだったからだよ！！」
「…ッ！」
「これ以上はいくら姐さんでも言うつもりはないよ。ただ、今はそっとしておいてあげて欲しいんだ」
　そう残してヤマメは去って行った。その場には踏み込んではいけない事を言わせてしまったに対する後悔をにじませた勇義が佇んでいるだけだった。

第五話　眩しい世界

＊＊＊＊＊

（あぁ、やっちゃった…。姐さん相手に怒鳴りつけるなんて…。全部解決したら酔い潰される程度で済むかな？）

ヤマメもまた後悔していた。が、すぐに頭を切り替えることにした。

（今はこいしのことだね。とりあえずキスメに話つけないと）

ヤマメが自分の中で結論を下すと同時にキスメの住む井戸に到着した。ヤマメは自分の顔を揉みほぐして、「いつものヤマメ」でキスメをよんだ。

「おーい。キスメはいるかい？」

そう言って井戸を覗くと中には誰もいなかった。誰かのところに行ったのだろうか？と考えて首をかしげようとした時、頭に衝撃がはしって井戸に落ちそうになってしまった。

「あいだっ！」

「いっつも中に居るとは限らないよ～」

上から”降ってきた”のはキスメだった。どうやらヤマメが来るのに合わせて悪戯を仕掛けたようだ。いかにも笑いが止まらないと言った具合のキスメがヤマメの横にあたる井戸の縁に桶ごと乗っかった。それを見たヤマメは頭をさすりながら苦笑した。

「いった～。久しぶりに直撃でくらったよ…」

「油断してたもんね～。それに、なんか悩み事？」

ずばり言われてちょっと驚いたヤマメだったが、その事を話す話さないは別にして先に用件を伝えることにした。

「いや、悩み事ってほどじゃないけど―」

「嘘。顔、揉みほぐしてたでしょ。何かを隠す為に演技するときは

いつもやってるもん」
「そこまで見てたのかい？まぁ、その事も話すけど今は別の用事できたんだ」
「？」
キスメの観察眼に再び苦笑しつつこいしの事を説明した。
「こいしって人って、あの巫女と魔法使い相手に絶叫しながら戦ってたひとだよね？」
するとキスメはそんな事を言ってのけた。その事にヤマメは眼を見張った。
「そうなの？」
「確か。地霊殿のさとりさんの妹だっていってたんだって」
「ん？又聞きなのかい？」
「うん。萃香さんからきいたよ。博麗神社で弾幕してるとこ見たんだって。見たかったなぁ」
「へぇ、後で聞いてみよ。とにかくその子がすごく人見知りでさ、お姉ちゃんの前に出る事さえ怖いんだって」
「…そうなの？なんか随分伝え聞いた印象と違うから違和感がするよ…」
「あたしは逆に絶叫するところが想像できないんだけど…」
若干人違いではないかと言う話にもなったが、とにかく翌日に約束をこぎつけてヤマメは別れようとした。がそうはいかなかった。
「それじゃあ、明日の九時だよ！」
「待ってヤマメ」
「？」
「ヤマメの悩み事、まだ聞いてないよ」
ごまかされたと感じたのか、キスメはご機嫌斜めだった。桶の縁に口を隠してじぃっとヤマメを見ている。実を言うとこいしの話が意外で忘れていたのだが。
「折角忘れてたんだけどな…」
「ぅぐ…でも聞きたいし。もしかしたら気を使ってたのかと思って

…」
ヤマメの発言に申し訳なさからか縮こまるキスメ。その頭を優しく撫でながらヤマメは笑った。
「きにしちゃいないよ。ただ、姐さんと喧嘩したってだけさ」
「え？それって結構大変なんじゃ…」
「どうってことはないよ。こいしをさとりさんに会わせたいってところは一緒みたいだし。ただ、ちょっと食い違っただけだから」
「…無理しちゃ駄目だよ。勇義さんは優しいから大丈夫だとは思うけど…」
「そうそう、あの人の事だし。きっと私がこいしのために動いてる事も通じてる。だから怒っちゃいないと思うよ」
そう言って今度こそ二人は別れた。ヤマメは旧都のメンストを歩きながら呟く。
「殻の外に出れば、こんなにも眩しいのにねぇ」
ヤマメの呟きは風に乗って雑踏の中に消えていった。

第五話　眩しい世界（後書き）

随分間が開いてしまいすみません。
今後も超不定期更新ですがよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8068v/

愛し、かなし、恋し。

2011年10月9日03時14分発行